

（日頃の看護実践に新たな視点を与えてくれる待望の本）



クロニックイルネス 人と病いの新たななかかわり

アイリーン・モロフ・ラプキン, パメラ D. ラーセン 著 黒江ゆり子 監訳 B5判・576 ページ
定価 7,140 円(本体 6,800 円+税 5%) ISBN 978-4-260-00058-1 医学書院 2007

評者

野並葉子

兵庫県立大学看護学部教授

病気に苦しむ人とその人を取り巻く
家族・社会理解のために

「病いを生きる人」たちの ケアの統合をめざして

クロニックイルネス(慢性の病い)という言葉は、臨床ではあまり馴染みがないかもしれない。ましてや、急性期中心となっていて医療機関では、慢性の病いというあたかも古い、自分のところは関係がない、遅れているというように思われるかも知れない。

しかし、よく考えていただきたい。そして、一人ひとりの患者様を思い出し、周りを見回していただきたい。病気が悪化して入院して来られる人、さまざまな重複疾患を抱えている人、そんな、病気だったらどうしようと心配して外来を訪れる人があふれているのではないだろうか。なぜ、こんなに糖尿病が増えているのか、それに対して看護はなす術もないのか。ただ、入院してきた人の治療に対応している看護でいいのか。病気で苦しんでいる人を中心に、ケアを統合していく必要があるのではないだろうか。

こんな状況のなかでは、病棟でも外来でも、在宅でもない、病いを生きる人を中心にケアを統合していく必要があるように思う。

本書は、『Chronic Illness—Impact and Interventions (5th)』が翻訳されたものである。看護の本としてはかなり高価だが、20年にわたって著者らによって精力的に改版され内容が充実してきた本書を、日本語で読むことができるということを考えるとそうでもないとも言える。

内容的にも、7章〈QOL〉、9章〈家族介護者〉、10章〈ボディイメージ〉、14章〈クライアントと家族の健康教育〉、22章〈在宅ケア〉、24章〈リハビリテーション〉といった今役立つ内容から、今後重要になってくると考えられる4章〈慢性の痛み〉、13章〈チェンジェイジェント〉、15章〈アドボカシー〉、18章〈看護師によるケースマネジメント〉など充実している。

看護実践の疑問や困難課題に出くわしたときに、どこかの章をひもといていただきたい。そうすると病気に苦しんでいる人とその人を取り巻く家族・社会をどう理解すればよいか、示唆を得ることができるだろう。それによって看護実践の視野が開けてきて、新たな支援方法が見出せてくるように思う。

最後に、丁寧に吟味された日本語翻訳書を出していただいたことに心より感謝するとともに、多くの看護者の手元に置いていただけることを願ってやまない。

■ご購入は、最寄の医書専門店または医学書院販売部 電話(03)3817-5657(直通)まで。
ホームページ(<http://www.igaku-shoin.co.jp>)からもお申し込みいただけます。